

高次脳機能障害に見られる特徴的な症状

注意障害

注意力・集中力の低下
作業にミスが多い、気が散りやすいなど、ひとつのことに集中することが難しくなります。また、疲れやすく、長い時間作業につくことができないこともあります。

記憶障害

記憶と学習の困難
物を置いた場所を忘れたり、同じことを何度も質問するなど、新しいことを学習し、覚えることが難しくなります。

社会的行動障害

行動と情緒の障害
気持ちがとても沈み込んだり、突然興奮して怒りだすなど、行動と情緒が不安定な状態を示します。抑うつ的になり、引きこもってしまうこともあります。

遂行機能障害

行き当たりばったりの行動をしたり、逆に指示がないと動けなくなるなど、目標を決め、計画し、実施・評価するといった一連の作業が困難になります。

半側空間無視

自分が見ている空間の片側を見落としてしまう障害です。そのため、食事で片側のものを残したり、片側にあるものにぶつかりやすかったりします。

失行症

動作がぎこちなく、道具がうまく使えないなど、手足は動くのに、意図した動作や指示された動作ができないなどの症状です。

地誌的記憶障害

近所で道に迷ったり、自宅のトイレがわからなくなったりする、地理や場所についての障害です。

半側身体失認

麻痺した手足がないかのように振舞ったり、逆に麻痺がないように振舞ったり、麻痺がなくても片側の体を使わないなどの症状が見られます。

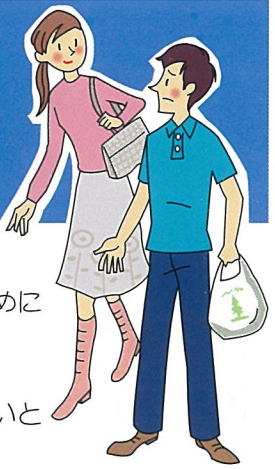
失認症

物の形や色がわからない、よく知っている人の顔がわからない、見分けられないなどの認知の障害です。

※ここで掲載している症状は「高次脳機能障害の診断・リハビリテーションマニュアル」（平成14年3月東京都発行）等を参考にしたものです。

これらの症状は、重複して出てくることが多く、その出方で一人ひとりの状態は異なります。また、本人が病気や障害という自覚を十分に持てないのも、この障害を理解しづらいものになっています。

どう接したらいいの？



おいつめない

リハビリは機能回復のために行われる訓練ですが、ある程度の機能回復は望めても、十分に進まないとな本人を追い込んでしまうことになる場合があるので、注意が必要です。

代替手段を身に付ける

失った機能を代替手段で置き換えることで、生活上の問題を解決する方法も有効です。記憶に問題があるならば、メモを取るようになることなどが考えられます。

単純な環境づくり

まわりの環境をできるだけわかりやすく単純にすることも大切です。持ち物を少なくしたりして、本人が管理するものを減らす工夫も有効です。

用件はひとつずつ

一度に2つ以上のことを伝えると混乱してしまうこともあるので、用件はひとつずつ伝えることです。メモを活用すれば複数の用件の実行も可能になります。

ことばだけにたよらない

予定や作業手順などを伝えるときは、ことばだけでなく、文字にしたり、絵や写真を使って示すことでわかりやすくなり混乱が少なくなります。



皆さんの理解ある対応が、本人家族への負担を軽くします。